

オオバンは急増しているのか？ — 群馬県全域の生息調査に向けて —

日本野鳥の会群馬

黒い水鳥オオバンについては、西日本を中心に越冬数の急激な増加現象が注目されている。群馬でも増加傾向にあるとされ、最近では一部地域で越冬数が急増しているらしい兆候が観察されている。

今回の展示では、群馬におけるオオバンを取り巻く状況について分かりやすく説明し、「日本野鳥の会群馬」による飛来数の実態把握を目的とした生息調査などの取り組みについても紹介する。

(昭和21年2月8日第三種郵便物認可) **夕刊 桐生タイムス** 2016年(平成28年)1月30日 土曜日 (12)

桐生タイムス社独自の
方針で、記事本文は小学
校5年生以上で学習する
漢字を中心に、ふりがな
をつけました。

みる よむ つながる **きりゅうタイムス** for ジュニア



毎月最終土曜、桐生・みどり地域とその
周辺で観察できる野鳥たちの姿を、四
季折々の話題も交えながら紹介します。
案内役は日本野鳥の会群馬のメンバーで
大間々博物館元館長の竹内寛さんです。

折々の鳥たち
①

この冬、みどり市笠
懸町の阿左美沼で異
変が起きています。水
面に集う鳥の中に、ク

生息に適した
環境を求めて

オオバンが大挙飛来

冬の阿左美沼に大きな異変が

イナハの仲間であるオオ
バンの姿が、例年にな
く多いためです。
オオバンはユーラシ
ア大陸北部などに広く
生息し、冬になると南
下して越冬します。日
本国内にも繁殖地や
越冬地がありますが、
20年ほど前から西日本
を中心にオオバンの数
が増えているという報
告もあるようです。
増加の原因は特定
されていません。19
90年代後半に中国を
襲った水害の影響で、
新たな越冬地を求め
て飛来しているのでは
ないかと、地球規模で
の説を唱える研究者も
いるようです。
日本で冬を過ごすオ
オバンは約10万羽。う
ち約6万羽が琵琶湖で
生息します。琵琶湖で

は10年前に比べ、生息
数が3倍に増えたとの
データもあります。
この冬、阿左美沼で
は約200羽のオオバ
ンが越冬しています
(昨年11月12月に観
察。これまでは見られ
たとしても、6羽ほ
ど。数の多かつた20
10年でもせいせい10
羽程度の群れでした。
増えた原因は分か
りませんが、

食べ物を探すオオバン
足の指には弁膜がある

りませんが、食べ物と
なる水草や藻類が豊
富なこと、湖面の広さ
など、オオバンが生息
しやすい環境を備え
ていることは確かにな
ります。

県内の鳥類事情に
詳しい人たちは、オオ
バンの増加傾向には
同意を示しています。

「昨年11月に多々良沼
で100羽以上の群れ
を見た」との情報も
あるようです。ただ、こ
うした傾向が今後も
続くかどうかは分かり
ません。

オオバン クイ科、体長30〜40cm。黒い体と白い顔、淡い紅を帯びた白いくちばしの特徴。キョん、キョんと鳴く。カマ類と違って足に水かきはなく、足指の指膜を使って泳ぐ。群馬県レッドデータブック(2012年改訂版)では準絶滅危種に指定されている。

オオバンは群馬で急増しているか？

日本野鳥の会群馬

はじめに

黒い羽に白い嘴と額版が特徴の水鳥オオバンは、かつては東毛（館林市など）で稀に見られるだけの希少種でした。やがて少しずつ越冬数が増え、1980年代には繁殖例も報告されています。さらに生息域も拡大し、1990年代後半には西毛（富岡市など）でも見られるようになりました。

こうして県内各地で増えてきたオオバンについて、近年の観察報告等により分かってきたことや、日本野鳥の会群馬として全県的な生息調査を試行するに至った状況などについて紹介します。

1. 東毛での急増現象

2015年11月の阿左美沼（みどり市）で、例年であれば数羽ほどだったオオバンが約200羽にまで急増していました。この多数のオオバンは、同月末に開催された「県民バードウオッチング in 阿左美沼」（群馬県主催）の際にも観察されています。

同じころ多々良沼（館林市）でも100羽以上のオオバンの群れを目撃報告があり、この時期（2015～16年・晩秋～冬季）の群馬で、オオバンの越冬数が急増していた可能性が見えてきたようです。

2. 全国一斉調査では対象外

オオバンの越冬数については、環境省の「ガン・カモ・ハクチョウ類全国一斉調査（例年1月中旬に実施）」ではクイナ科であるオオバンは対象外のため、これまで全国の生息状況はもちろん、群馬県での越冬数の変動も把握されていませんでした。

他県の状況を見渡すと、西日本におけるオオバンの飛来数の急激な増加が、国内最大の越冬地・琵琶湖（最多年で約8万羽）のある滋賀県の水鳥調査で明らかとなっています。

琵琶湖の場合と群馬の阿左美沼とでは環境や規模は全く違いますが、統計上は増加した羽数のピークが2016年1月にあり、翌年の同季には減少している点などが符合しているようです。

3. 増加で見えてきた生態

水草や水生昆虫などを主食とするオオバンですが、越冬数の増加により見られる機会が増えたことで、魚を捕食するシーンなどの珍しい生態も記録されています。

また、繁殖地へ渡らず留鳥として夏に残るオオバンの姿が各地で観察されているのも、飛来する羽数が増えた結果なのでしょう。

ま と め

このように、群馬でもオオバンが増加傾向にあることなどが分かってきています。ただ、増加した原因については、地球の温暖化だけでは説明できないとの説もあり、現時点ではまだ解明されていないようです。

日本野鳥の会群馬では、近年に県内の一部の湖沼で見られたオオバンの急増現象などから、全県的な生息調査の実施を検討し、オオバンの羽数の把握に向けての取り組みを開始しています。こうした地道な調査データの蓄積が、将来的にオオバンを取り巻く状況を知るうえでの貴重な資料となるかもしれません。